

モスクワ日本人学校における現地理解教育の取り組みについて

前モスクワ日本人学校 教諭

愛知県半田市立横川小学校 教諭 山本 宮英子

キーワード：現地理解教育、現地校交流

1. はじめに

(1) ロシアの教育制度について

ロシアの教育制度は、4-5-2制で、義務教育は9年。かつてロシアの学校の学期はすべて4学期制だったが、今は、3学期制、5学期制など学校によって異なる。長期休業は、秋、冬、春、夏休みがあり、3か月ある夏休みが一番長い。ロシアの学校では固有の校名がなく「1500番校」のように番号がつけられている。また、ロシアにも、私立や公立があり、日本と同じで授業料が私立では有料、公立では無料となっている。

月	文	理	文	理
代数学	文学	歴史	科学	歴史
体育	英語/ ロシア語	代数学1/ 代数学2	文学	体育
生物学	英語/ ロシア語	体育	美術・文学	ロシア語/ 代数学
幾何学/ パソコン	経済	幾何学	代数学1/ 代数学2	ロシア語/ 英語
ロシア語/ 幾何学	科学	物理学	幾何学/ パソコン	ロシア語/ 英語
代数学/ ロシア語	物理学	パソコン/ 英語	幾何学/ パソコン	物理学
	生物学			

ロシアの小学校には9科目、中学校では18科目ある。左の表は、ロシアの中3の時間割であるが、日本の「理科」のようにまとまっているのではなく、「科学」や「生物学」、「物理学」のように分かれているのが特徴

である。また、ロシア語と文学というものがあり、どちらも「国語」であるが、ロシア語は日本での英語のように文法などを勉強する。そして、ロシアでは、小学生も中学生のように、期末テストを受け、もし、不合格の場合は、合格できるまで何度も追試があるという。ロシアの教育の特徴は子供たちによく勉強させることである。基礎知識だけではなく、創造性を伸ばすために自分で考えるプログラムも多く、生徒の自主性を尊重する選択科目が導入されている。

(2) モスクワ日本人学校について

ロシア連邦の首都モスクワにある本校は、1967年創立でヨーロッパにある日本人学校の中で最も長い歴史をもつ学校である。1967年10月2日にあるアパートの2部屋で全校児童数16名から始まった。現在の場所に移ってきたのが1977年。2017年10月には50周年記念式典が開かれる予定である。児童生徒数は120名前後を推移している。

治安上の問題から、子どもたちの登下校はバスか、自家用車、タクシー、あるいは保護者の付き添いが必要である。ロシアで生活していても、自由に街中を出歩くことはほとんどないため、子どもたちは、ロシア人と気楽に話したり、ロシアの生活文化に触れたりする機会はとても少ない。ロシアにいながら日本人に囲まれて生活をしている子どもが多いのが実情である。

一般にロシア人と言えば「こわい」「冷たい」というイメージがあるかもしれないが、電車やバスに乗れば高齢者や子供に席を譲るロシア人、道に迷っていると親切に声をかけてくれるロシア人に遭遇することがある。現地理解をしていく上で一番大切なことは、人と関わったり、文化に触れたりすることであると考えます。

モスクワ日本人学校では、年1回の芸術鑑賞教室も行い、子どもたちが芸術性豊かなロシアならではの文化に直接触れる機会を設けている。また同じ建物の中に同居している学校との仲を深めるため、また異文化理解を推し進めるために、スポーツ交流や文化交流も不定期に実施している。こうした現地理解教育の1つとして年に2回行われている現地校交流について紹介する。

2. 現地理解教育～現地校との交流を通して～

(1) 平成26年度の実践（中学部）

今まで長年交流を行ってきた現地校（1535番校）の日本語学科がなくなったことで、新しく学校を探すところ

から始まった。そこで、現地スタッフに探していただいたのが、週2回、放課後に日本語を勉強するクラブがあるという1223番校。交流を申し込んだところ、快く引き受けて下さった。最初に1223番校を本校へ招待した。

モスクワ日本人学校での交流

- ①音楽。この授業は専任講師に依頼して行った。最初に「富士山」の歌詞を英語で紹介し、練習後に合唱。次に楽器演奏。日本人学校の生徒がベアのロシア人生徒に鉄琴や木琴などの楽器を指導し、最後は一緒に演奏をした。
- ②書写。筆の使い方を指導し、相手生徒の名前をひらがなで書いたり、好きな文字を書いたりした。完成した作品は、ファイルに入れプレゼント。

①では、英語やロシア語、身振り手振りで合奏や歌詞を教えることを苦勞しながらも楽しんでた。ロシアの義務教育では楽器演奏の指導はしないそうで、1223番校の生徒も初めは苦勞していたが、最後は演奏を楽しんでいた。

1223番校での交流

- ①日本語を学んでいる生徒の日本語発表を聞く。
- ②5年生の美術の授業へ参加。マトリョーシカの説明を受け、その後、画用紙に書かれたマトリョーシカに色をつけていった。
- ③調理実習。6年生の児童とロシアの家庭料理ブリヌイを調理し、会食。

②の途中で、絵を描いている途中、男の子がバラライカを演奏してくれ、雰囲気まで盛り上げてくれた。また、すべての授業終了後には日本をイメージして作ったケーキもふるまっていたなど、万全の準備をいただいていた。



(2) 26年度の反省をいかし27年度へ

平成26年度は、生徒同士が関われるよう楽器演奏や書道を設定した。しかし1223番校の取り組みには及ばなかった。特に「日本語でのロシア紹介」は、相手校の学習の様子もよく分かり、聞いて楽しく、日本人として嬉しい気持ちになった。そこで、27年度は、我々もロシア語で日本を紹介できるよう事前指導を入れ発表することにした。学校の授業で週1回学んでいるロシア語を発表する機会にしたいと考えたのだ。

紹介する内容は、中学2年生が国語の授業で考え、「やさしい日本語」で表現。それをロシア語に翻訳することを冬休みの宿題とした。それをロシア語講師に訂正していただき、ロシア語の授業内で発音の練習をし、交流学習に臨んだ。

(3) 平成27年度の実践

モスクワ日本人学校での交流

- ①「ロシアを語ろう」発表
(「日本とロシアの牛乳について」英語で発表、「モスクワの自転車事情」日本語で発表)
- ②ロシア語による日本文化紹介(伝統遊び・建物・和食)、
- ③書写、折り紙、伝統遊び(コマ・メンコ・紙風船・けん玉・竹とんぼ・お手玉)の3つに分かれて日本文化体験。
- ④「カチューシャ」をロシア語と日本語で歌う。

③の日本文化体験は、2つの教室とホールを使って3つのブースを作り、ロシアの生徒たちに15分交代で回っ

てもらった。本校の中学生も3つに別れ、自分の担当するものをロシアの生徒たちに教えた。私は書写ブース担当だったが、「平仮名で名前を書く」「簡単な漢字を書く」だけでなく、「筆で絵を描く」というアイデアが生徒から出た。簡単な水墨画だ。描いたのは、富士山とマトリョーシカ、日本とロシアの国旗。ロシアの子どもたちは、8歳から16歳まで幅広い年齢だったので、小さい子どもたちは絵を喜んで描いていた。子どもの豊かな発想を実感した一例である。



1223 番校での交流

- ①ロシア伝統舞踏体験… 民族衣装を着た児童が踊りを見せてくれた。その後、本校生徒も一緒に教えてもらいながら踊った。民族衣装を着せてもらった生徒もいた。
- ②「大きなかぶ」の日本語劇鑑賞… 小2に相当する相手校児童による劇。ねずみ役の子は逆立ちしながら登場し、さすがロシアだと感じた。日本語も流暢だった。
- ③ロシアの昔の道具の説明… 洗濯板は同じ、千歯扱きのようなものなど農具でも似たものが多かった。こうしたところに共通点を感じられるのも、興味深かった。
- ④ロシアの「チャストゥーシ」… 交流前に「覚えてきてください」と渡された詩。ロシア語だったので、ロシア語の先生方の指導のもと練習。リズムに乗せて読む。

(4) 27年度の反省をいかし28年度へ

今回、ロシア語での発表という新しい取り組みを入れたことで、生徒の事前の意欲はかなり高まっていた。交流後の反省で、「ロシア語や英語でコミュニケーションを取りたい」と書く生徒がいたので、来年度は自由に話ができる場面を多く設定したいと考えた。

平成28年度は私が小学部に異動したため、小学部での実践となった。小学部は長年1239番校との実践を行っていたが、担当する先生が産休とのことで本年度は交流できなくなった。しかし、何とか子供たちに交流の機会を与えたいと思い、新たな学校探しを行い、1471番校との交流を行うことになった。

小学5、6年生の実践で、27年度に中学部で実践した「ロシア語による日本文化紹介」を社会科で学習する「米」で挑戦することとした。また、家庭科での学習を生かし、「おにぎり作り」を計画した。一緒にものを作り、会食することで会話もよりはずむのではないかと考えたのだ。紹介内容は、5、6年生が考え、ロシア語講師に翻訳していただいた。ロシア語の授業内で発音練習をし、「おにぎり作り」は、家庭科の授業で練習し、交流学习に臨んだ。

(5) 平成28年度の実践

モスクワ日本人学校での交流

- ①ロシア語による日本文化紹介（伝統遊び）
- ②けん玉、お手玉、あやとりの日本文化体験…日本人学校の児童が相手校の生徒に教える。
- ③ロシア語による日本文化紹介（米）
- ④グループに分かれて、「おにぎり作り」と会食

②の日本文化体験では、本校の児童が相手校の児童にやり方を教え、いっしょに遊んだ。④では、「おにぎり」の具材をロシアでも入手可能な鮭とツナマヨネーズにし、「家に帰ってぜひ作ってください」と伝えた。会食後は、折り紙をしたり、UNOをしたりと自由に遊び、そこで会話が1番盛り上がったという児童が多かった。

1471 番校での実践（小学部5, 6年生と相手校の6年生、9年生）

①相手校9年生とのゲーム…3種類のゲームを行った。1つ目はイス取りゲーム。1回のゲームで4～6人がイスに座れなくなり、そのメンバーがグループとなった。そのグループごとに自己紹介を行った。二つ目は「カエル」というゲーム。日本の「震源地」に似ている。日本だと参加者は震源地の人が分かっており、その人の動きのまねをするが、ロシアの場合は、参加者も震源地がわかっていない。「カエル（震源地）」が舌を出し、それを見た人は座っていく。真ん中に立った「鬼」は誰が「カエル」かを当てるゲーム。最後に「ウィンク」ゲームも行った。）

②食堂で昼食…相手校の食堂で給食を食べた。11時15分から開始の「朝食」であった。メニューは、オムレツ、パン、紅茶である。

③ロシアのお守り作り体験・絵付け体験…相手校の9年生が先生となったお守り作り体験。刺しゅう糸を編んで作った。もう一つは、相手校6年生が先生となった絵付け体験。スプーンの形をした紙にロシアの伝統的な絵柄を描いていく。本校の児童は2つに分かれて体験を行った。

ロシアの学校では11時過ぎから朝食を、13時過ぎに昼食をとるということであった。子どもの多い家庭や低所得の家庭は無料で食べることができるそうである。登校前に家で朝食を食べるので、簡単な食事である。「家で朝食を食べてから13時の昼食までにお腹が空くのに、なぜ日本では食べないのですか」と逆に質問されて、答えに詰まった。日本では、朝食抜きの家庭も増えている。また、朝食から昼食までの時間も長い。学校での「朝食」というのも一考に値するかもしれないと感じた。

3. おわりに

交流学习後の児童生徒の感想を紹介する。

- 「意外とロシアの人達は良い人で驚きました。もっとむすっとした人だと思っていたけれど、ニコニコ笑っている人たちでした」
- 「僕たちのおもてなしよりもはるかに良いものを向こうの学校は準備してくれたからびっくりした。ロシアの民族衣装を着せてくれたり、ロシアの楽器をやらせてくれたりしたことから、ロシアの文化を伝えたいという必死さが伝わってきた」
- 「おにぎりを食べている間に『日本へ行きたいですか?』と問いかけたら、『ぜひ行ってみたい。日本はいろんなものがあって楽しそう』と言われたので、とても嬉しかったです」

1つ目の感想から、現地交流の第一歩が達成されたことが分かる。残念ながら、ロシアにいながら、ロシアという国や人への印象は良くない子どもたちが多。それを振り払うことができれば、子供たちの柔軟さでこの国の文化も吸収していけるであろう。

2つ目からは、自分の文化を伝える、そして伝えたいという思いをもつことの大切さ、3つ目からは、自国を知ってもらえる嬉しさを感じることができる。

相手の文化を理解する前に、自分の考え方や文化を理解することが大事であり、自分の文化を理解した上で相手と対話しなければならない。そのために「日本文化を紹介する」という実践は、相手校に文化を知ってもらうだけでなく、我々日本人が自国の文化を知るという意味でも有用であった。そして、伝えるためには、ロシア語という言葉学ぶことももちろんだが、「日本文化をしっかりと伝えたい」という気持ちが何より大切だと感じた。

モスクワ日本人学校で現地理解教育を進めるにあたり、ロシア語講師の先生、現地スタッフに協力していただきながら、有意義な学習を進めることができたことに感謝している。3年間の経験で学び得たことをこれからの教育活動に生かして努力していきたい。